



第 130 号

2025 年 3 月 4 日

◆ 発 行 ◆

名古屋労災職業病研究会

名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4 階

TEL&FAX : 052-837-7420

e-mail : roushokuken@be.to

<http://nagoya-rosai.com/>



五十嵐徹さん（61 歳）は、胸膜中皮腫を発症後、手術、抗がん剤、放射線治療は受けないと決断し、食生活への真剣な取り組みを行っています（2025 年 1 月 15 日 長岡市内 関連記事 P2～P6）

130 号目次

- ✎ がんの三大治療は受けないと決めていました
塗装作業でアスベストにばく露し胸膜中皮腫を発症した五十嵐徹さん
P2～P6
- ✎ 一宮市のアスベスト廃棄物放置問題
P6～P8
- ✎ 全国一斉アスベスト被害ホットライン
P8
- ✎ 沖縄支部結成記念セミナー 中皮腫・肺がんアスベスト疾患セミナー in 沖縄
P9～P11
- ✎ 在宅医療実習
P11～P12
- ✎ 臨時総会の開催について
P12

がんの三大治療は受けないと決めていました 塗装作業でアスベストにばく露し胸膜中皮腫を発症した五十嵐徹さん

2023年9月1日、五十嵐徹さん（61歳）は、長岡中央総合病院で悪性胸膜中皮腫の最終病理診断結果を伝えられました。病名告知とあわせて、呼吸器内科の女性医師より、シスプラチンとペメトレキセドの抗がん剤併用療法やニボルバムとイピリムマブの免疫チェックポイント阻害薬併用療法が提案されましたが、それらの治療を受けることは断りました。五十嵐さんは、中皮腫を発症する前から自分ががんになった時は、手術、抗がん剤、放射線の三大治療は受けないと決めていました。理由は、長年塗装業を営んできたことから仕事で取り扱う有機溶剤に経皮的、経口的、吸入的にばく露しており、自身が将来がんを発症する可能性があると考えた日々の中で、たまたま知った評論家や医師の著作を濫読するうちにがんの三大治療は受けないと考えるようになりました。昔から、食品添加物や農薬、石炭に含まれる界面活性剤の安全性には日常的に注意を払ってきましたが、そのような関心の延長線上でジャーナリストの船瀬俊介や立花隆、医師の内海聡や吉野敏明、安保徹、宗像久男の著作を読み影響を受けてきました。船瀬俊介氏には、「抗がん剤に殺される」という著書がありますが、そのような著作を読み五十嵐さんは、抗がん剤は増がん剤で怖いと考えるようになりました。筆者とのインタビューでも、立花隆氏が朝日新聞主催のがんの講演会の際に出会った医師達が口々に抗がん剤は効かないという話を控室でしていたというエピソードを記述した著作の一部を読み聞かせてくれました。内海聡や吉野敏明、安保徹、宗像久男は、現代医療について批判をしてきた医師達で様々な著作を出版しています。五十嵐さんは、「今後も無治療を貫く」と決めています。

五十嵐さんの無治療を貫くという意味は、がんの三大治療は受けないという意味です。昨年8月に右胸腔に大量の胸水が貯留した時は、同月10日から21日まで胸腔ドレーンを挿入、留置し、機器で持続的に吸引し排液する治療を受けましたが、こういった治療は受けなければならないと考えています。ドレーンを留置する時は麻酔をするので痛みは感じませんでした。周りに研修医たちがいてその様子を見ていました。

緊急入院した10日のカルテには、右中葉下葉は胸水で無気肺、血性胸水を600ml排液し、培養・生化・細胞診に提出。11日のカルテには、1800ml（淡血性）を排液という記録があり相当量の胸水が貯留したことが分かりました。右胸膜に腫瘍が多発しており胸水細胞診では明らかな悪性所見が得られなかったことから、16日には、全身麻酔で右の脇の下の胸に二箇所の穴をあけ、そこから細いカメラと道具を挿入し、胸膜の腫瘍を切除し病理検査を行うための手術が行われました。手術後、寝返りを打つことが出来ないほどの痛みがありましたが、痛み止めの薬は2錠服用するのにとどめました。右胸腔鏡下手術は、肋骨や筋肉を切断しないので痛みが楽で、術後の日常生活への復帰に有利な術式と考えられています。五十嵐さんは、2か月程前から労作時の息切れを感じていましたが、10日に近くの内科医院を受診したところ胸水が見つかり長岡中央総合病院を受診しました。22日に同院を退院し、前述した通り9月1日に上皮型の悪性胸膜中皮腫の病名告知を受けました。

五十嵐さんから筆者に電話での相談があったのは2023年9月中旬でした。10月に面談を行い、労災保険請求の支援を行いました。治療を断ったことから長岡中央総合病院に通院することが出来なくなり、最初に受診した内科医院で経過を見てもらうことになりました。労災保険の休業補償給付の請求を行うため、何処かの医療機関に定期的に通ってもらう必要がありました。この頃、五十嵐さんは、すでに休業に入っていました。五十嵐さんの自宅での面談時、筆者は、複数の中皮腫患者さんへのインタビューや面談の経験から、ニボルバム（商品名オプジーボ）とイピリムマブ（商品名ヤーボイ）の2種類の免疫チェックポイ

ント阻害薬を併用する治療を受けたあと、比較的経過が良好な患者さんを複数知っていることを伝えましたが、五十嵐さんが免疫チェックポイント療法を受けないという決意を変えられることはしませんでした。五十嵐さんは、前述の船瀬俊介氏の別の著書を筆者に見せてくれて、東京都内で定期的に波動医療を受けていることを教えてくれました。手に持つ船瀬氏の著作のページには、沢山の付箋が貼られており、五十嵐さんが熟読しているのが分かりました。

五十嵐さんは、経過観察のために通院する長岡の内科医院の他に東京都内のクリニックに3か月に1回通っています。東京のクリニックは、歯科や内科、がん治療外来等を標榜しています。五十嵐さんは、このクリニックで全身の波動を機械で調べた後、身体の波動を整えてもらう波動医療と呼ばれる民間医療を受けています。健康保険の使えない自由診療なので、一回3万円程の費用がかかります。

東京のクリニックの院長は、「四毒抜きで国民も日本も健康になる」を提唱しており、全ての患者にあなたは今まで何を食べてきたのか必ず聞くといいです。五十嵐さんも同院長から指導を受けながら、日々の食生活に気を配り、四毒抜きを守った食事をしています。「四毒」とは、小麦、植物油、乳製品、甘い物です。同院長は、病気を治し、健康的な体を目指すために、様々な病気の原因になっているこれら4つの食品を排除する食事法が重要であると説明しています。同院長はさらに、四毒を抜いたら、五悪も抜くことが必要であると説明しています。五悪とは、食品添加物、農薬、化学肥料、除草剤、遺伝子組換え食品で、五十嵐さんはこれらのものも摂取しないよう気を付けています。同院長のY o u T u b eチャンネルを筆者も視聴してみましたが、四毒抜きの食事というのは、ご飯、みそ汁、焼き魚、切り干し大根のような和食を食べる食事法であることが理解出来ました。同院長のY o u T u b e動画をいくつか視聴し、「お酒やたばこをやめるより先に四毒、五悪をまずやめましょう」や、「小腹がすいたら日本人はお米を食べればよい」というコメントが印象に残りました。五十嵐さんは、同院長から「がん患者は、5年間は四毒抜きの食生活を続け、身体に蓄積した直物油などの有害物質をデトックス（排出）して欲しい」と言われています。理由は、脂溶性の有害物質はデトックスに非常に時間がかかるからです。雪の舞う長岡市内で行われた筆者とのインタビューの日、五十嵐さんはお土産の日本酒ととても香ばしい香りのする昔ながらの製法で作られた美味しいおかきを持って来てくれました。

主治医の東京の院長の他、五十嵐さんに強い影響を与えたのは、1977年に米国上院栄養・人間ニーズに関する特別委員会で公表された二つの報告書「マクガバン・レポート」です。当時、米国では85万人もの国民が心臓疾患と血管系の疾患によって死亡し、米国政府はそれらの疾患に対して、毎年500億ドル以上もの費用を負担している状況でした。米国政府は、保健費用の軽減と米国民の生活の質を向上させるために、食事目標とその実現のための具体的な食品選択及び調理の指針を設定する義務があると判断したことから同レポートが作成されました（大阪府立大学・戸川律子、マクガバン・レポートと日本における食の「近代化」の内発的契機）。全粒穀物、果物、野菜、鶏肉、魚、低脂肪乳を増やし、肉類、バター、卵、脂肪、砂糖、塩分を減らすことも報告した同レポートは議論を巻き起こし、畜産業界や砂糖業界等からは抗議が巻き起こりました。

塗装作業でのアスベストばく露があったことから、五十嵐さんの労災は認定されました。しかし、昨年11月、中皮腫発症から1年3か月经過した段階で労災保険の休業補償の支給が打ち切られてしまいました。五十嵐さんの体調が良く、経過観察をしていた内科医院の医師が「軽作業可能」と労働基準監督署に伝えたことが理由でした。発症後、右の胸膜が自然に癒着したことから胸水の再貯留は起きておらず、体調も良く大型自動二輪免許の取得やサックスの演奏を習ったり、クレー射撃に行ったりしていました。若い頃、400ccのバイ

クに乗っていましたが、こんな体になったしやりたいことをやろうと大型バイクの免許を取得しました。免許は取得したものの妻から「交通事故で死んだら元も子もなくなるからバイクを買わないで欲しい。何のためにあなたのために献立を考えているのか。私の努力が無になる」と言われ大型バイクを購入するのは止めました。妻は、若い頃から食品添加物などには注意を払ってきており、五十嵐さんの「四毒五悪抜き」の生活を支持してくれています。五十嵐さんは、「夫婦で向いている方向が同じだからよかった」と筆者に話してくれました。

労災の休業補償の打ち切りが労働基準監督署から伝えられた時は、「ガクッとなり」、「こういうシステムありなのかな」と思いましたが、塗装会社を経営していた時に低い給付基礎日額で特別加入していた労災保険で認定されたことから休業補償の一日の給付額は低額で、仕事をすれば労災の休業補償より稼げるということで仕事をしていっぱい稼いでいこうとすぐに頭を切り替えたといいます。休業中は仕事が増えても、仲間に投げていましたが、今後は、夏場に屋根の上に上がるようなハードな塗装作業は避けて、沢山いる仲間の仕事を手伝ったり、出来る範囲で塗装の仕事をしていくつもりでいます。労災認定されていても、休業補償給付を受けることが出来ない被災者は、石綿健康被害救済給付制度で療養手当がもらえることがあることからその申請をしました。

五十嵐さんは、パンが好きだったと言い、昨年末にパンを発酵させる機械やパンを焼く機械を買い揃え、小麦粉を使わない米粉のパン作りに挑戦しています。九州から取り寄せた米粉パン専用の米粉にイースト菌とみりん、ぬるま湯を加え練り、型に入れて焼きます。イースト菌の発酵を促進させるには糖分が欠かせませんが、砂糖の代わりにみりんを使っています。娘さんと「がん患者でも安心して食べられる」をキャッチフレーズに米粉のパンやお弁当を提供するお店がやれたらと語り合うこともあるということでした。

五十嵐さんは猟銃を持って狩猟にも出かけます。もともと魚釣りや素潜りが好きでしたが、獲物を捕る究極形は鉄砲を使用した狩猟であると考え1年がかりで狩猟免許を取得し4年前から始めました。筆者とのインタビューの時は鴨猟の猟期で、先週も鴨を獲ってきたと話してくれました。猟には安全のため、猟友会のハンター仲間と一緒にいくということで最近回数は減りましたが、多い時は週三日、四日であることもあったということでした。一日に一人5羽まで捕ってよいということですが、4羽くらい落とすこともあるということでした。「今の季節の鴨肉は脂がのっていて最高、食べると翌日力が湧き体調が違う」と言い、「変な薬よりも効きますよ」と話してくれました。鴨肉は、フライパンで油を使用せずねぎと一緒にいためたり、ねぎま串にして備長炭で焼いたりして食べるということで、ねぎま串は備長炭の匂いが鴨肉に戻り最高ということでした。備長炭は炉端焼きの店が閉店した時に5俵程購入しました。天然の鴨は、添加物を含む人工飼料でなく、自然の餌を食べて成長しており身体に良いと考えています。

五十嵐さんは、中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会の活動に参加する中で建設アスベスト訴訟における、建材メーカーの責任を追及する訴訟の原告になりたいと考えるようになりました。筆者に「かつてのアスベスト建材メーカーは、アスベストの有害性を知っていながら製造していた。亡くなった人達がどんなに悔しい思いをしてきたかと思うと、メーカーの罪を明らかにして責任の取り方をはっきりさせなければだめじゃないか」と考えるようになったことや、「一人、二人よりも（原告の）人数が多い方がいい。大きなウェーブになれば良いと思い参加したい」と思いを語ってくれました。現在、労災関係資料を建設アスベスト訴訟の弁護団に送り原告になれるか検討をしてもらっています。

1963年12月29日に長岡市に生まれた五十嵐さんは、1981年1月、17歳の時に地元の塗装会社に入社しました。社長を入れて5人の会社で、一般住宅の屋根や外壁、内壁の塗装工事を請負っていました。住宅の軒下にはられたアスベストを含有するケイ酸カル

シウム板を水性塗料で塗装する作業を沢山行いましたが、塗装工事の前に、ケイ酸カルシウム板の取り付けに用いられたビスの頭を隠すためにパテを塗り、その後、パテを平らにするためにサンドペーパーでパテを擦る作業を必ず行っていました。ビス頭のパテだけでなく、ケイ酸カルシウム板も同時に擦ることから、粉じんが顔面に飛び散ってきました。

室内の作業では、五十嵐さんが窓枠等の塗装作業をするすぐ近くで他の作業員がケイ酸カルシウム板や岩綿吸音板、プラスターボード等、内装に使用する成形板の切断を行ったり、切断面をヤスリで削ったりして粉じんが舞っていました。若い五十嵐さんは、それらの製品にアスベストが含まれている可能性があることを知りませんでした。塗装の時に、建材を削った後の粉をラスター刷毛で払いその時も粉じんが飛散しました。内装工事中は、室内全体が粉っぽくなっていた記憶があります。

工場鉄骨の塗装では、鉄骨の塗装部分に付着した吹付材をサンドペーパーや皮スキなどで擦って除去しました。アスベストか岩綿かは定かではありませんでしたが、吹付材はグレーや白でふわふわしている物質でした。

塗料を塗る作業だけでなく、外壁や内壁のコンクリート面のひび割れや穴を埋めて補修するために使用するセメント系下地調整材やマンション、共同住宅、アパートなどの外壁に専用のガンを使用し、模様をつけるために吹き付ける仕上塗材の施工にも従事しました。

五十嵐さんの記憶している下地調整材はラフトンフィラーという商品名でセメント袋に入っており、使用前に袋から容器に投入して水を加え電動の攪拌機で攪拌しましたが、袋から投入する時や、攪拌し始めた時に粉じんが飛散しアスベストにばく露しました。広い面積の場合は専用のガンで吹き付けたりローラーで塗ったりしましたが、吹き付けやローラー塗りができない場所ではヘラを使用し塗りました。コンクリートの角がかけているときなどもヘラを使い整形し補修しました。吹き付けやローラーで塗っている間に顔面や腕、作業着に調整剤が飛び散り付着しましたが、作業中に乾燥し、手で顔をぬぐったりした時などにアスベストにばく露しました。

仕上塗材はラフトンジャンボという商品名を記憶しています。一斗缶に水分を含んだドロドロの状態が入っており、水を加えて、電動の攪拌機で攪拌し、吹き付けし易い粘度に調整しました。吹き付けを行っている間に顔面や腕、作業着に塗材が飛散し付着しましたが、作業中に乾燥し、手で顔をぬぐったりした時などにアスベストにばく露しました。

塗装会社の従業員として働いていた時の現場で記憶にあるのは中越高校の新築工事です。室内での塗装作業が多い現場で、内装材の切断作業と平行して作業することがよくあったことが記憶に残っています。

1986年9月に5年9か月勤務した塗装会社を退職し、長岡市内で塗装業を営んでいた父親と一緒に働き、その後、1992年9月に有限会社五十嵐塗装を設立し、2018年11月に退職するまで代表取締役を務めました。会社では常に3、4人程、多い時は6人の従業員を雇用していました。

自身で会社を経営している時も、労働者の時のように、室内での塗装作業中に他の作業員が成形板の切断や加工をしていたりしてアスベストにばく露する機会がありました。改築や改装の工事でも請負いましたが、建物の外壁塗り替えの現場では、古くなった仕上塗材をワイヤーブラシで削り取り平らにする作業があり、アスベストを含有している可能性のある古い乾燥した塗材の粉じんが沢山飛散していました。鉄骨造の建物の改築工事では、鉄骨の吹付材を削り取り塗り替える作業も行いました。

2004年10月より労働安全衛生法施行令の一部を改正する政令が施行され石綿セメント円筒、押出成形セメント板、住宅屋根用化粧スレート、繊維強化セメント板、窯業系サイディング、クラッチフェーシング、クラッチライニング、ブレーキパッド、ブレーキライニ

ング、接着剤のアスベスト製品が禁止されました。さらに、2005年10月には労働安全衛生法施行令の一部改正が行われ、アスベストをその重量の0.1%を超えて含有するものが禁止されるなど、五十嵐さんが塗装会社を経営していた時期は、アスベスト製品の規制が強化されていった時期と重なります。しかし五十嵐さんによると、「現場に出る私たちの感覚としては石綿が危険という認識はまだありませんでした」という状況でした。

五十嵐さんは仲間達に無治療であることを伝えており、「四毒」を抜くことを勧めていることからずっこけられないと思っており、「食をメインにして、食を突き詰める」決意を固めています。労職研の専従で一人のカメラマンに過ぎない筆者は、食生活への真剣な取り組みが中皮腫に良い影響を与えるという情報に接したことが無く、五十嵐さんの選択や決意を聞いて正直、不安に駆られます。しかし、五十嵐さんは、「明るく未来を考える。そういう風な精神を持って生きると病気が治りやすくなる」という考えがあるから目標を立てるようにしている。バイクの免許を取るにしても、サックスを習うにしてもどんなちっちゃいことでもいいけれど、こういう病気に囚われずにモチベーション上げる。モチベーションを上げるために何か目標を作るというのは意識している。ああ、だめなんだなんで落ち込まないように、がんなんて簡単に治るというノリでいます。そうでなければ治療を拒むことはしませんよ」と筆者に語り、現にそのように日々生活しています。五十嵐さんが胸膜中皮腫を発症してから本稿を執筆している2025年2月26日時点までで1年6か月が経ちますが、五十嵐さんは本当に、本当に元気です。

(事務局 成田 博厚)

一宮市のアスベスト廃棄物の放置問題

1月16日の夜、労職研事務所に中日新聞の記者から電話がかかってきました。電話の要件は、一宮市千秋町に所在する産業廃棄物収集運搬業者の施設に野ざらして大量のアスベスト廃棄物が放置してある。業者が廃業状態で撤去されず、市は、昨年10月の大気環境測定でアスベストが検出されなかったことから、まだ、対策を取っていない。この施設近くの道路は通学路にもなっているが、この件について筆者の意見を聞かせて欲しいというものでした。



翌日の朝刊で、アスベスト廃棄物を飛散防止せず貯蔵した名古屋市港区のサーライン（株）と同社社長が労働局に書類送検されたことが報道され、記事には、「石綿は細かく砕くほど危険性が高まる。大気環境測定で検出されなくても、粉じんがある限り飛散されていると考えた方がいい。長期的には住民に健康被害が出る可能性がある。行政も責任を持ち、ただちに（廃棄物）処理すべきだ」という筆者のコメントも掲載されていました。

記事によると、サーラインは、一宮市千秋町にある同社の廃棄物保管収集場所「一宮センター」にアスベストを含む建材を、粉じんを飛散させない対策を取らず貯蔵し、従業員に粉じん用マスクを着用させず重機で建材を破碎させたほか、県内外の複数の取引業者にアスベストが含まれていることを伝えず譲渡したとして、1月16日に愛知労働局により労働安全衛生法違反で書類送検されました。労働局によると、アスベストを含む廃棄物の貯蔵や譲渡

の摘発は県内で初めてということです。サーラインは、昨年１月以降、従業員がおらず、廃業状態になっています。

記事は続けて、サーラインの一宮センターには、建物を解体する際などに出たアスベストを含む廃棄物計２７０トン超が野ざらしにされ、高さは、２階建て住宅の屋根付近まで達し、１年程前まで深夜や早朝に重機が廃棄物を粉砕するけたたましい音が響いていたことを伝えていました。あわせて、市が昨年１０月に現場周辺の大気環境測定を実施したところアスベストは不検出で、市はサーラインに保管基準の厳守と廃棄物の撤去を促してきましたが、アスベスト飛散の危険性が高まった場合は、市は行政代執行で廃棄物にシートをかけたり、廃棄物を撤去したりすることも検討するということがも伝えていました。

１月１９日、日没近くに筆者は一宮市千秋町の廃棄物保管場所を訪ねました。平島バス停で名鉄バスを降り、５分ほど道路をまっすぐ歩いていくと右側に廃棄物の山が見えてきました。施設はフェンスで囲われていましたが、金網のゲートの横に、「産業廃棄物積替えのための保管場所」という看板が掲げてあり、看板には、会社名、電話番号などとともに平成３０年９月４日の許可年月日も記載されていました。問題になった保管場所の横には、狭い道路を挟んでフェンスで囲われたもう一つ施設があり、産業廃棄物の中間処理場および保管施設という看板が掲げられていました。中間処理場および保管施設から、今回問題になっている廃棄物積替えのための保管場所に成形板等を運び込んだようで、中間処理場および保健施設のゲート前には破砕された成形板が落ちていました。

保管場所は、学校のグラウンドぐらいはありそうな面積で、その中に廃棄物の山が３つありました。ゲートの一番近くに細かく破砕された成形板の山がありその横に、成形板と石やコンクリ片、他の廃棄物の混ざった山があり、一番奥に、成型板や他の廃棄物が混ざった山がありました。ゲート近くの山の成形板は、フレコンに詰め込みやすいようにするためか、



一宮市千秋町のアスベスト廃棄物保管場所

かなり細かく破碎され、風が吹けば粉じんが飛散する状態でした。保管場所の西側には、畑と幅の狭い用水路を挟んで住宅やマンションが沢山建つ地域で北東側には、多くの人々が立ち寄るローソンとセルフ給油所がありました。

この日、現場で会い、お話しした市議会議員さんによると、1年前から現在の状況と地主さんから聞いているとのことでした。市長、市役所ともに現在のままではよいとは考えていないが、行政代執行をするにも、廃棄処分をするにも最終的に地主が費用負担をしなければならない可能性があり、地主も頭を抱えているということでした。

今回の問題について一宮市の担当者に電話でお話しを聞いたところ、行政代執行を行う際は、その前に廃棄物処理法による措置命令を行政が会社に出さなければならないとのことで、この件についてもアスベスト飛散の恐れがあるということで、サーラインに対して廃棄物にシートを被せる又は、全量を撤去するよう命じる措置命令を発出することができるか現在、検討しているということでした。筆者は、大気環境測定で何も出ていない中で、本当に措置命令が出せるか不透明と考えました。

（事務局 成田 博厚）

全国一斉アスベスト被害ホットラインを実施

2024年12月12日から13日にかけて中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会（本部：東京江東区、以下、患者と家族の会）が全国一斉アスベスト被害ホットラインを開催し、東京、名古屋、大阪、福岡の各拠点でスタッフがアスベスト被害に関する相談を受け付けました。労職研に患者と家族の会東海支部が置かれていることから、東海地方、北陸、長野、新潟からの相談電話は杉浦医院4階にある八事の事務所で受けました。患者と家族の会全国事務局で中皮腫サポートキャラバン隊理事長の平田勝久さんや会員の藤本さん、筆者などが分担して電話を受けました。名古屋への二日間の相談電話件数は、1日目が45件、2日目が20件の計65件でした。他のポイントでの二日間の相談電話件数は、東京が93件、大阪が57件、福岡が48件との報告が実施最終日のメールで流れていました。このホットラインは、アスベスト被害者の救済とアスベスト問題を世の中によく知ってもらうことを目的に、患者と家族の会が厚生労働省の石綿労災認定事業場情報公表の時期に合わせ毎年行っています。



このホットラインは、アスベスト被害者の救済とアスベスト問題を世の中によく知ってもらうことを目的に、患者と家族の会が厚生労働省の石綿労災認定事業場情報公表の時期に合わせ毎年行っています。

沢山の相談を受けましたが、運送会社でドライバーとして働き、吹付材やスレートを現場に運んでいたという肺がん患者の男性からの相談や、愛知県内のスレート工場で働いていた父親が30年前に肺がんで死亡したという男性の相談、長年、船の機関員として乗船し肺がんを発症したという男性の相談、中皮腫を発症した一級建築士の男性やじん肺を発症しているらしい石綿スレート工場に勤務していた男性の妻からの相談、長年、一人親方として配管工事に従事し肺がんを発症したという男性の妻からの相談が印象に残りました。この他、悪性胸膜中皮腫の治験に関する相談や、かつて原発や造船所で働いたことから今後の健康被害が心配というような相談も寄せられました。

中皮腫サポートキャラバン隊理事長の平田さんは、腹膜中皮腫患者として療養してきた経験から、様々なアドバイスを患者や家族にしていました。

（事務局 成田 博厚）

沖縄支部結成記念セミナー

中皮腫・肺がんアスベスト疾患セミナーin 沖縄

1月25日から1月26日にかけて那覇市で中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会（以後、患者と家族の会と言います。）の沖縄支部結成記念セミナーやアスベスト相談会、アスベストユニオン第19回定期大会が開催され筆者も参加しました。

アスベスト相談会

1月25日は午前中から沖縄県立図書館3Fホールでアスベスト健康被害相談会があり、筆者も関西労働者安全センターの酒井恭輔さんの横で男性じん肺患者さんの話を聞きました。男性は、離島からの定期就航船で那覇まで来たということで、定期就航船は一日一往復なので、明日、自宅に帰るということでした。

男性は歳を取り沖縄に帰郷するまで大阪で研り工をしていたということで、じん肺管理区分管理2の決定を受けじん肺手帳を持っていました。現在は、母牛を飼育して子牛を産ませ、その子牛を売る「繁殖農家」の仕事をしているということでした。男性は、今後、肺機能検査などを受け、酒井さんの支援で労災請求をするつもりでいます。

沖縄支部結成記念セミナー

午後2時から、県立図書館3Fホールで中皮腫・肺がんアスベスト疾患セミナーin 沖縄が開催されました。冒頭、患者と家族の会の小菅千恵子会長が挨拶に立ち、「患者と家族の会は活動を始めて21年目になり、沖縄支部は24番目の支部となりました。どのような治療をやっているかとか励ましあいながら、分かち合いながら皆さんが集まる支部になっていけばと思う」と話しました。

国立病院機構沖縄病院の大湾勤子院長は、「今回沖縄支部ができるということで大変心強くありがたいことだと思っています。中皮腫は私たちのなかでも難しい病気です。当事者の声はとても大きいので、活動を続けて皆さんの声をあげて言って欲しい。沖縄県では当院が一番（中皮腫の）患者様を沢山さん診させていただいているので経験をいくらかでも分かち合えたらと思っています」と挨拶しました。

セミナーでの最初の講演は、沖縄病院呼吸器腫瘍科医長の久田友哉医師が、「悪性胸膜中皮腫の沖縄県の現状と薬物治療—沖縄病院での治療を中心に—」と題して行いました。久田医師は、抗がん剤治療や免疫チェックポイント療法等の治療や副作用について説明した後、沖縄県や沖縄病院の患者さん達の話に移りました。2023年に沖縄県で中皮腫で死亡した患者は12人で、2016年から2022年までの県内の中皮腫の登録者数は診断が97例、治療が77例ということでした。97例の内、8割が胸膜中皮腫の患者で、県内では、沖縄病院が一番多く、診断、治療をしていて26例診断をして24例の治療を行ったということでした。沖縄病院で治療を受けた24例の内、手術は5例、薬物療法は17例（免疫チェックポイント阻害薬4例、プラチナ併用化学療法4



大湾勤子院長



久田友哉医師



河崎英範医師



古堅誠医師

例)、緩和療法のみは 2 例ということでした。

次に「中皮腫の外科的治療」と題して、沖縄病院外科・呼吸器外科手術部長／臨床研究部長の河崎英範医師が講演を行いました。2009年から2022年までの間に沖縄病院では7例の胸膜中皮腫患者の手術を行い、胸膜剥離術が4例、肺全摘術が1例、その他が2例ということでした。7例中4例の方が生存していて注目しているのは、病院を受診してから手術するまで半年からそれ以上の期間がかかっており、中皮腫の診断が難しいと考えているということでした。胸膜中皮腫の手術の役割は肉眼的完全切除を目指すことですが、胸膜剥離術も肺全摘術も手術侵襲が大きく、かつ、術後再発率が高いことから慎重に手術適応を判断する必要があること、手術生検では多くの組織が採取可能で確定診断が得やすく、集学的治療につなげることが可能ということでした。

最後に「肺がん治療の進展からみるこれからの中皮腫治療」と題して琉球大学病院第一内科講師の古堅誠医師の講演が行われました。中皮腫の治療法に比べ非小細胞肺がん1次治療レジメンは11あり、このレジメン数の多さと抗がん剤と免疫チェックポイント阻害薬が併用出来るのが中皮腫の治療法と比べ肺がんの治療法の大きな違いという話が印象に残りました。内訳は、キートルーダレジメンだけでも3つ、アテゾリズマムのレジメンが4つ、ニボルマブレジメンが2つなどです。がん遺伝子パネル検査についての説明もありました。



沖縄支部結成記念セミナー参加者の皆様

この後、中皮腫サポートキャラバン隊理事長の平田勝久さんと講演をしてくださった3人の医師、沖縄支部世話人で腹膜中皮腫患者の鹿川真弓さん、埼玉県の胸膜中皮腫患者の高久弥生さんらでトークショーが行われました。鹿川さんは、入院中は運ばれてくる食事の匂いや医師の付けている香水がきつかったとのことで、主治医が来てくれるのは嬉しいのだけれど香水の匂いがきつかったと話し会場の笑いを誘っていました。



トークショーで話す鹿川真弓さん（右から2番目）

アスベストユニオン定期大会

翌1月26日には、朝から沖縄県立図書館でアスベストユニオン第19回定期大会が行われました。冒頭、文泰竜執行委員長は、「（アスベストの）環境ばく露についてどうするか、組合の運動方針の検討が必要だ。（患者の）生活の困窮、医療の問題などがある。国に対してどういう要請ができるか、皆の力を借りて連携してやっていけたら」と挨拶しました。



委員長挨拶の後、議事の進行が行われ、最後に、本総会に提出されたすべての議案が承認されました。

（事務局 成田 博厚）

在宅医療実習

今回、在宅医療実習の一環として、杉浦医院にて外来見学や訪問診療、訪問看護等に行かせていただきました。アットホームな雰囲気の中で、地域医療の現場や大学病院との違いについて学ぶ機会をいただき、とても貴重で有意義な時間を過ごすことができました。

訪問診療では、森先生指導の下、バイタル測定や血糖測定、胃瘻交換や気管切開チューブ交換といった手技を積極的に体験させてくださり、在宅医療で必要とされる手技について実践的に深く学ぶことができました。また、訪問看護に同行する中で、医師をはじめ訪問看護

師、訪問介護士、デイサービスの作業療法士・理学療法士など、多職種が連携し、生活や医療支援に多方面から関わっていることを知ることができました。さらに、森先生が代表を務めるNPO法人ささしまサポートセンターの活動や支援団体の方々の活動を見学し、ホームレスや生活保護を受けている生活困窮者の方に対する生活・医療支援の実際や、支援を受けるまでの一連の流れやそれに関わる職種や機関、さらには生活・医療費給付金の制度についても理解を深めることができました。

今回の実習を通して、在宅医療が高齢化社会の進む現代において非常に重要な役割を果たしていることを改めて実感しました。在宅医療は、主に治療を目的とする大学病院や市中病院などの大病院とは異なり、患者さんが住み慣れた場所で、見慣れた医師や看護師、介護士等がケアや体調管理、日常生活をより良く送るためのサポートを行うことが主軸であると感じました。また、今回の実習を通して、患者さん一人ひとりの生活背景や価値観を尊重することの大切さを実感しました。今後は、患者さん中心のケアを提供できるよう、医学的知識だけでなく、患者さんとの信頼関係を築くためのコミュニケーション能力を身につけていきたいと考えています。

(藤田医科大学医学部 5年 水野花鈴)

《臨時総会の開催について》

3月末日で当団体を解散し、4月1日に一般社団法人名古屋労災職業病センターを設立することなどについて議論する臨時総会を下記の日時に開催いたします。会員の皆様は、総会議案書とともにお送りした出欠ハガキの投函をお願いします。欠席される皆様は、出欠ハガキに印刷してある委任状をお送りいただくと幸甚に存じます

日時：2025年3月14日(金)13時～15時

場所：名古屋労災職業病研究会事務所



2025年1月			2025年2月		
	10日	ユニオンみえ旗開き		2日	名古屋労職研運営委員会
	25日	沖縄セミナー		6日	アスベストユニオン会議

【労職研 会費・カンパ振込先】

郵便振替 □座番号 00860-5-96923

加入者 名古屋労災職業病研究会

発行 名古屋労災職業病研究会

発行者：森 亮太

名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4 階

Tel./Fax.052-837-7420

e-mail: roushokuken@oregano.ocn.ne.jp

http://nagoya-rosai.com/